

教育実習を終えて

日本語日本文学科 4回生

青田舞子

実習に行く前は、三週間という期間が非常に長いと思っていました。しかし、いざ行ってみるとあっという間に過ぎていきました。振り返ってみると、教育実習を通して得られたものは非常に多く、本当に貴重な体験が出来た三週間でした。実習中、緊張や不安で押しつぶされそうな時もありましたが、終えてみると人として大きく成長出来たように思います。

授業に関していえば教材研究はいくらやっても、やり過ぎることはないのだと痛感しました。大学では模擬授業を行っても、相手は大学生なので質問してもすぐに答えが返ってきます。ましてや、みんな教職の講義を受講しているだけあり、質問後の展開の流れを汲み取り教師役が求めている回答をくれるので、スムーズに進めることが出来ます。しかし実際の生徒相手だと、そううまくは進められません。文法や語句の意味、物語の内容理解などはもちろん、私が留意していなかったことも生徒から質問され、思わぬ質問に狼狽したり、欲しい答えがなかなか出なかったため、誘導質問を度々してしまいました。授業後の反省会では担当の先生から「生徒の理解度を把握することは何よりも大切なことだ」ということと「教材研究は授業の基盤」だということを指導していただきました。また教材を隅々まで調べておくことで、臨機応変に対応出来るようにもなるだけでなく、自身の勉強にもなり、生徒と共に教師も成長することが出来るのだと教えていただきました。

授業以外の仕事については、勉強不足であまりよく知らなかったのですが想像よりも多く驚きました。生徒指導や進路指導はもちろん、それ以外にも校門前で朝の挨拶活動や SHR の進行、清掃活動などさまざまな仕事があります。私は教材研究や授業計画を考えるだけで精一杯で、先生方が黙々と授業準備とともに他の仕事をこなされている姿を拝見し、ただ単に子どもが好きだけでは教師の激務が勤まらないのだと学びました。そして教師という職業は、私が考えていたよりもはるかに多忙で責任も重く、認識の甘さが身に染みた実習となりました。

実習中、本当に私に教師が勤まるのだろうかと挫折しそうに何度もなりましたが、最終日に担当のクラスの生徒たちから「先生の授業は楽しかったよ、頑張って夢を叶えてください」と応援してもらい、弱まっていた気持ちが再び強まりました。辛いこともありましたが、それ以上に得たものがあります。それらは教師を目指している私にとってはかけがえのない、宝物となりました。

そしてこの実習から、たくさんの人に支えられていることも知りました。受け入れてくださった実習校の生徒たちや担当の先生をはじめ、毎日朝早くに送り出してくれた両親、実習校に様子を見に来てくださった北山先生、大学で指導してくださった先生方、さまざまな手続きなどをしてくださった教職支援センターの方々。その他、私の教育実習に携わっていただいた全ての方にお礼を申し上げます。これからも教育実習で得たことを活かしながら、日々努力していきたいと思えます。

教育実習を終えて

英語英米文学科 4回生

岩崎 浩美

地元の中学校での3週間の教育実習はあっという間で、先生方や生徒たちから学ぶことが多く、とても充実していました。私の目標は、失敗を恐れずにさまざまなことに挑戦することで、常にそのことを意識して実習に取り組みました。

私は1年生を担当させていただきました。実習が始まるまではどのように生徒たちと接すればいいのか、生徒たちに受け入れてもらえるのかなど、不安と緊張でいっぱいでした。しかし、生徒たちの笑顔を見た時、明るい挨拶を聞いた時には、その不安も打ち消されました。私が今回の実習をするうえで、まず初めにしたことは、生徒たちの名前と顔を覚えることです。生徒たちのことを名前と呼べるようになると、生徒たちとの距離もぐっと近くなったように感じました。休憩時間には教室に行って会話したり、給食も一緒に教室で食べたりして、積極的に交流していきました。

授業の見学をさせていただいた時に、学年によって教え方が違うことや、クラスによっても雰囲気が違うので指導の仕方にも工夫が必要なのに気付きました。1年生の授業を見学することが多かったのですが、生徒たちは楽しそうに授業に参加しており、私も生徒たちを楽しませる授業がしたいと思うようになりました。初めての授業では緊張をされていて失敗してしまった点もありましたが、できなかったことを次に活かせばいいと目標を立てて、次の授業に臨めました。研究授業では普段は英語が苦手な生徒も大きな声で発表をしてくれたり、積極的に授業に参加してくれる生徒たちの頑張りを見て嬉しく思いました。それに応えられるよう、そして、私自身も楽しみながら授業ができたと思います。

放課後の部活動や挨拶活動では、担当クラスの生徒たちだけでなく、他のクラスや他学年の生徒たちとも触れ合うことができました。授業以外で生徒たちと交流する時は「先生」として接するというより、同じ目線で自然に接するように心がけていました。生徒たちと触れ合うことで、何かを発信する難しさや、生徒たちの反応を待つ難しさを感じましたが、それと同時に楽しさや面白さを感じました。最終日には「“本当の”先生になって帰ってきてね!」と言われ、本当に嬉しく思いました。

3週間、本当に多くのことを学び、体験することができました。生徒たちのことをよく理解し、何よりも生徒のことを一番に考えている先生方の姿を見て、教師という仕事の大変さや面白さ、責任の重大さを感じました。そして、教育実習を通して「先生になりたい」という希望から「絶対に先生になる」という決意に変えることができました。いつも笑顔で、情熱をもって、この実習で得たものを活かしていきたいと思います。

教育実習を終えて

史学科 4 回生

韋 美 帆

私は、母校ではなく他の学校で3週間の実習をさせていただきました。実習校は私の通っていた学校の近くにあり、名前も場所も知っていましたが、中へ入るのは初めてだったので、事前訪問の際は不安と緊張がありました。しかし、実習期間に入り生徒と接してみると、とても人懐こくて、彼らのために授業を精一杯頑張ろうという気持ちになり3週間の実習もあっという間に感じられました。

1週目は期末テストがあり、授業を見学する機会もなく生徒と接する機会もあまりありませんでしたが、学校での教師の役割については先生方の実際の経験・体験談から学びました。そこでは、教師の生徒に対する気持ちやそれに伴う苦労などさまざまな話を聞かせていただいて、大変な職業ではあるけれども、少しでも生徒のためになるように日々努めている先生方の想いを感じ、自身の仕事に誇りをもっているのだということが十分伝わってきました。そして、教師という職業に改めて魅力を感じました。

2週目には期末テストの返却があり、授業も新しい分野へ進んでいきました。私は2年生の社会の担当でした。授業では、「声を大きく発すること」と「分かりやすい授業をすること」を目標にしました。どんなに分かりやすい授業をしても声が小さく生徒に聞こえなければ意味がないと思ったので、第一の目標として大きな声で話すことを心がけましたが、教室は思ったよりも広く、また、教室の外や他の教室からの声の方が大きいなど、初めての授業を終えた後は生徒に申し訳ない気持ちでいっぱい、残りの授業を無事に終えることが出来るだろうかという心配ばかりしていました。しかし、私を指導してくださった先生や授業を見に来られていた先生方からさまざまなアドバイスをいただき、工夫をして、授業を繰り返していく内に徐々に授業らしく感じられるようになってともに、授業をする楽しさを感じられるようになりました。先生のアドバイスの中で特に印象に残っているのは、「今でもまだ授業を時間通りに終えることが出来ないし、クラスによって多少の差はある」という言葉です。これは、それぞれのクラスに特色があり、同じように進むことが出来ないという理由からだそうですが、それぞれのクラスの個性を大切にしながら授業を進める、というその先生の生徒への愛情だと思いました。もちろんテストは全クラス同じように行うので、最終的には合うように時間配分をされていて、教師という職業は臨機応変に動かなければならぬのだと強く感じました。

また、私は生徒との距離を縮めるために、休み時間は授業の準備がない限り生徒と話をし、放課後には出来るだけ部活動の見学に行くなどして生徒と一緒に過ごす時間を可能な限り増やし、生徒とのコミュニケーションをとる事に努めました。そうしていく内に、生徒から私に声を掛けてくれる機会も増え、授業中にも授業を盛り上げようとしてくれるなど、生徒にはたくさん助けられました。彼らがいたからこそ、私は、この3週間を充実した楽しい期間だったと感じることが出来ました。

私がこの実習で学んだ事は、「授業は一人でつくるものではない」ということです。もちろん、他の人に頼ってばかりではいけないのですが、自分の授業が他人から見たらどのように見えるのか、感じるのかを考えながら授業を構築し、さまざまな工夫を加えていかなければ、自分が何を伝えたいのかが理解されないのではないかと感じました。そのためにも、他の先生方の意見や授業を受けている生徒の感想に耳を傾けることを忘れてはいけないと感じ、また、「教える」という気持ちも大切ではありますが、私自身も生徒から「学ぶ」という意識をもつことでよりよい授業作りが出来るのではないかと思います。今回の実習の経験を活かして今後も頑張っていきたいです。

教育実習を終えて

神戸国際教養学科 4回生

西川 千晶

私は母校で3週間の教育実習を行いました。上手く授業をすることが出来るかという不安を抱いていましたが、自分の出来ることを失敗を恐れずに頑張ろうと心に決め実習に臨みました。

初めての授業ではとても緊張をして声が震えていたことを今でも覚えています。大学の授業の中で模擬授業をしていましたが、実際に生徒に対して授業をすることは初めてだったので私が行った授業が上手く生徒に伝えることが出来るのかと不安でした。授業後に生徒にアンケートを取り感想を書いてもらいました。自分自身の不安が授業に出ていたことを生徒に指摘され、授業に集中してくれていると思うと同時に、改善するべきところが多くあると痛感しました。授業後に毎回、指導教官と反省会を行いました。どのように授業を進めるべきか分からない点や指導方法を教えてもらい、改善をすることを何度も繰り返しました。授業後に分かりやすかったということを書いてもらうことが出来た時は本当にうれしかったです。

私のクラス担当は1年生でした。指導教官以外の先生の授業を見学させていただいた際に、どの学年でも classroom English を用いていました。中学校の3年間で英語を学んでいるので多く用いるようにしていると言われていました。私自身も用いなければならないと思っていましたが、説明をするなかで classroom English を使うことを忘れてしまうことが多くありました。また、授業の準備をしていても生徒からは予想をしていない質問をされることもあり、気持ちに余裕がなくなってしまうと classroom English を使うよりも日本語で答えてしまうことが多くなるので、授業の準備は入念にすることの大切さも学びました。

授業だけではなく、ショートホームルームや休み時間、掃除の時間に生徒と関わるようにしました。また、文化祭の練習を見ていたのでその時にも話をしました。信頼関係を築いていく中でコミュニケーションをとることは重要であると思うので積極的に生徒と話をするようにしました。

実習が始まる前は3週間をやりきれぬか不安でいっぱいでしたが、終わって振り返るとあっという間に過ぎてしまいました。大学の授業の中だけでは学ぶことのできない貴重な体験をすることが出来ました。私にとって忘れられない密度の濃いこの時間を今後も活かし、これからも成長をしていきたいです。

教育実習を終えて

教育学科 3回生

浦谷千恵

教育実習を終えて、私が一番得たものは「自信」です。教育実習へ行く前は、自分が児童の前に立ち、45分間授業を展開する姿が想像出来ず、不安でいっぱいでした。しかし、実習を積み重ね、授業実習を一つ、また一つと終える度に先生から評価していただき、成長を感じるとともに、その成長が「自信」へとつながっているように感じました。

私が教育実習を通して学んだことは3つあります。

まず一つ目は、経験することの大切さです。私は、教育実習へ行く上で、目標を立てていたことがあります。それは、授業における児童の発言の取り上げ方や受け応えの仕方を学ぶことです。授業参観や実習を重ね、日々たくさんの児童と接し、話すことを通じて、どう受け応えをしたらよいかを次第に身につけ、スムーズな流れで関わる事が出来るようになりました。教育を学んでいて、「何事も経験が大切」という言葉を目にしますが、本当にその通りであると身にしみて感じました。失敗を重ね、試行錯誤していくからこそ次へつなげることが出来ます。それが最後には、一つの自分なりの授業スタイルや教育観につながるのだと思いました。

二つ目は、教師としての心構えや姿勢です。「教壇の上に立ったら恥ずかしいと思うよりも度胸が大切。次の発問を気にするよりもしっかりと発言する児童の目を見て、身を児童の方へ乗り出すくらいの姿勢で授業に挑むこと」これは、私が一番印象に残っている校長先生の言葉です。私はこの言葉を聞き、授業に初めて挑む時の気持ちの入れ方が変わったように思います。自分が恥ずかしいと思う気持ちよりも、児童が45分間の授業を受けて、今日の授業はよく分かった、受けてよかったと思える授業にしていこうと心がけました。教師が話しすぎるのではなく、児童が発言する場を多く設けることを念頭に置いて、児童の学習意欲が高められるよう集中して毎回の授業に挑みました。最後の研究授業の時には、校長先生から「最初よりだいぶ慣れて堂々とした姿勢で授業出来ていましたね。」と温かい言葉をかけていただけだったので嬉しかったです。

最後に、現場の先生方から、向上心を持ち行動していく大切さを学びました。同じ行いをするにあっても、心持ちや捉え方一つで受ける印象が大きく違ってきます。嫌だな、辛いなど思いながら行うことと、自分のための貴重な機会だと思いこなすこととはしている側も、また、見ている側に与える印象も違ってくると思います。私は毎回の授業にそれぞれ目標を設定し、向上心を持ち挑みました。この教育実習を通して学んだ、何事にも向上心を持ち、失敗を恐れず挑戦していく姿勢を忘れずに今後も、人生におけるあらゆる試練に立ち向かっていきたいといます。そして、一つでも「自信」へとつなげていける事柄を増やしていきたいといます。

教育実習を終えた今、次に控えているのは、教員採用試験です。「次会う時は本当の教師として」実習校の先生方との約束を一日でも早く果たせるように、今後とも教員採用試験に向けてひたすら勉強に励んでいきたいといます。

教育実習を終えて

教育学科 3回生

酒井綾菜

私が教育実習で一番の目標としていたのは、子どもたちとコミュニケーションをしっかりと取り、思いっきり遊ぶことです。最初のうちは私も子どもたちも緊張気味で、いつも私のところに寄ってきてくれる子と話をしていることが多かったのですが、日が経つにつれ、それまであまり話をしなかった子ともよく話をするようになりました。やはり、休み時間が一番子どもたちも親しみをもって話ができるので、普段は見えなかった、知らなかったことを知る良い機会になりました。

私がこの教育実習の中で一番心配していたのは授業です。大学で模擬授業をしたことは何度かありますが、その場合は相手が大学生で、ある程度の答えや反応も予想できます。実際に小学生を相手に授業をするのは初めてで、自分の予想と異なることや、考えもしないことが起こり、授業中に何度戸惑ったか知りません。その上、45分間きっちり授業をした経験も無かったので、授業に対しては大きな不安を抱えて実習に臨みました。最初は上手くいかないことも多く、時間配分、板書、発問の仕方、間などたくさんの課題がありました。実習を終えた今でももちろん課題はたくさんありますが、授業実習を積み重ねていく中で、前の時間に自分ができなかったことができるようになったり、少しずつ授業中に周りを見回る余裕を持てるようになった時に、授業をすることの楽しさを感じることができました。授業をする中でもう一つ楽しいと感じたことは、授業の中でしか見られない子どもたちの一面を見れたことです。授業は生き物だという言葉をよく耳にしますが、本当にその通りで、教師の準備や、授業の中で児童の発言やひらめきをどのように学習へと活かしていくのかがとても大切だと改めて感じました。たくさん授業をさせていただきましたがやはり、一番上手くいった授業は研究授業でした。教師が準備した分、考えた分だけ、子どもたちの反応と理解で返ってくるというのを実感しました。

実習が始まるまでは不安と心配しか無く、楽しむという余裕もありませんでしたが、実習が始まるとその不安はすぐに無くなりました。長いだろうと思っていた4週間もあっという間に過ぎ、毎日小学校に行くのが楽しみでした。教育実習を終えて教師になろうという気持ちを強く持ち直すことができたのが私にとって一番嬉しいことです。この実習で自分に少し自信を持てるようになりました。自分に教師なんてなれるのかと思っていましたが、今は教師になっている自分を早く見たいです。実習に行ったと言っても、まだまだ教師の仕事のほんの一部しか理解できていません。自分の知識の無さや対応力、応用力の乏しさもこれからの課題です。まだまだ勉強不足だと痛感したことも多いですが、本当に充実した4週間で過ごすことができました。私にとってこの実習で過ごした日々は宝物です。教師は毎日子どもの成長に立ち会い、その手助けができる素晴らしい仕事であると改めて感じました。この気持ちをいつまでも忘れずにさらに成長し、教師の道に進みたいと思います。

教育実習を終えて

教育学科 3 回生

林 幸 加

教育実習を終えてまず初めに強く思うことは、“絶対に教員採用試験に通って教師になりたい”ということです。正直なところ私は教育実習に行くまで、大学に通っている価値が見出せずにいました。教育について学び、教員の免許をとる勉強をしていましたが、“教師になりたい”とはあまり思えず、なれたらなりたいたいかな、とりあえず免許だけはとっておこう、と本当に軽い気持ちだったので、毎日片道一時間半かけて通い、長い講義を受けるだけの生活に飽き飽きしていました。それと同時に親に高い学費を払ってもらい通えているのに、そんな中途半端な気持ちで通っている自分に対してすごく嫌気がさし、何度も大学を辞めてしまおうと考えていたほどでした。しかし、この教育実習で実際現場に行かせていただき、子どもと接し、日々教師という仕事を体験させていただいたことで、現場の厳しさ、大変さ、難しさを痛感したのはもちろんのことですが、それ以上に教師という仕事の喜びややり甲斐を知り、教育実習が終わるころには、“必ず本物の教師になり、現場に戻ってきたい！” そう思うようになっていました。また、初めて大学を辞めずに続けて来て良かった、と思えるようにもなっていました。

次に、私は子どもにとって教師という存在の大きさについて深く考えを変えさせられました。教育実習にいくまでは、教材通りに授業をこなし、大きなトラブルもなくあたりさわりなく日々を過ごさせてあげるのが一番だ、それが良い先生だ、そう思っていました。しかし、生徒指導の講話を受け、そんな生半可な気持ちでは務まらないこと、自分が思っている何倍にも子どもの成長過程において教師は重要な存在であり、責任のある仕事であるということ学びました。それは、次のようなことです。「子どもは心に貯金箱をもっており、毎日家に帰り家族に認めてもらったり、褒めてもらうことでその貯金箱をいっぱいにする。その状態で学校に行き、いっぱいになった貯金を一枚ずつパワーに替えながら使い、子どもなりにさまざまなことと戦っている。しかし、現在は母子家庭や再婚などが増え、夜一人ぼっちで寝ている子どもや、上手く家族に馴染めず寂しい思いをしている子ども、酷いときには虐待を受けていたり、と貯金箱が空っぽのまま学校にやってくる子どもがたくさんいる。そんな、家でいっぱいにならない貯金箱に少しでも貯金をしてやれるのは、我々教師である。子どもの心の貯金箱を少しでも潤わせてあげること、暖かく包み込み存在を認めてやり、安心出来る存在でいることは、授業をすることより重要で、教師の一番の仕事だ。」実際に教育実習に行ってから、子どものふとした瞬間の寂しそうな表情や、ボソッともらす悩みなどを耳にし、してやりたいけど出来ない現実、何も出来ない歯痒さを感じていた私にとっては物凄く心に響き、考え方を大きく変えさせられた瞬間でした。

最後に、私がこの教育実習で得た最大のものは、感謝と夢への決意です。まず高校時代、特に学びたいものが無かった私に、さまざまなことを考慮し教育の道に進むことを強く推してくれた恩師。そんな中途半端な気持ちの私を応援し、大学に行かせてくれた父と母。「大学を辞めたい」と何度言っても、「一時の感情に流されるな、最後までやりきると何かが見えてくる、頑張れ！逃げるな！」と暖かさ厳しさをいつも支えてくれました。毎日暖かい言葉や有難い助言をしてくださり、たくさんサポートし、応

援してくださったK小学校の先生方。日々お忙しい中私のために多大なる時間を費やし、授業技術や教師としてのノウハウなど、さまざまなことを指導し、数えきれないほど支え、教師という仕事の魅力を私に教えてくださった担当の先生。そして最後に、まだまだ半人前の私を先生！先生！と慕い、全力で向き合ってくれ、頑張っている姿や、悔しがる姿、泣き顔や最高の笑顔を見せてくれ、教師の喜びややり甲斐を感じさせてくれた子ども達。全ての方のおかげで私は心から叶えたいと思える夢を見つけられました。また、実習最終日に子どものお母様からいただいたお手紙や、子どもの涙や言葉や手紙。「必ず戻ってこい。そしてまた一緒に現場で働こう！」とおっしゃってくださった校長先生や担当の先生のお言葉。「次に会うときは本当の先生になった時」という子どもとの約束。それら全てのことが、やっと見つけられた夢を絶対に叶えてみせる、という強い決意に変えてくれました。これらのこと一つひとつを思い返すと、本当に自分自身とても大きく成長でき、人生で一番といっても過言ではないほど素晴らしい一ヶ月を過ごさせていただいたことに、感謝の気持ちでいっぱいです。



教育実習を終えて

教育学科 3回生

平松由衣

私は、この4週間で数えきれないほど多くの大切なことを得ることができました。初めは不安でいっぱいでしたが、明るく優しい子どもたちや温かく素晴らしい先生方の中で、とても幸せで充実した、かけがえのない4週間で過ごすことができました。H小学校の先生方、子どもたちに感謝の気持ちでいっぱいです。

私は、この教育実習において3つの課題をもって取り組みました。まず一つ目は、「子どもを知り、子どもから学ぶ」です。実習でしかできない4週間におよぶ授業観察・参加をさせていただき、子どもたち一人ひとりの様子や変化を見ること、また、どのように考えて発言し行動するのかをしっかりと考えることができました。また、登校してくるときの様子や休み時間、給食時間、係活動の取り組み方など、1日のさまざまな場面で子どもたちを知ることができました。できるだけ多くの時間、子どもたちと関わることを大切にして過ごしていると、毎日どんどんと個性や良い所が見えてきて、それをどのように引き出し、全体に活かしていくかを考えるようになりました。そして、新たな視点で子どもたちや担任の先生を見させていただくことで、そこから得るものも多くありました。また、先生が「先生の一生懸命さが伝わっているから、子どもたちは先生に応えようとしているし、授業中も心のキャッチボールができているんだよ。」と言ってくれたことが嬉しく、今も心に残っています。自分自身が強い思いをもって子どもたち一人ひとりのことを考え、一生懸命やることで、信頼関係が築けていくのだと実感しました。また、多くの先生方が協力してくださり、学校中のさまざまな教室を観察させていただくことができました。実習を通して、「子どもを知り、子どもから学ぶ」ということが、教師として基本中の基本であり、それをなくしては何も始まらないと強く思いました。どんなときも子どもを見て、小さな変化も見逃さず、子どもから学ぶという姿勢をいつも持ち続ける教師になりたいと思います。

二つ目は、「教師の仕事全体を理解し、実践する」です。実習で感じたことは、教師の仕事は数えきれないほどあり本当に大変だということです。限られた時間の中で何をどのようにやっていくか、時間の使い方も学ぶことができました。また、先生方一人ひとりには大切にしている思いがあり、何気ない一言や行動にも意図があるということをお教壇にいただきました。そして、とても勉強になったのが、非常に質の高い授業実習をさせていただいたことです。大学の附属小学校で道徳を研究されていた先生や、体育を専門にされていた先生に忙しい時間をぬって熱心に指導していただきました。この2教科だけでなく、5つの授業全てにおいて、多くの先生方に何度も指導していただき、たくさんの力を身につけることができたと思います。授業は本当に大変で難しいものですが、いつも向上心をもって、子どもから学び、子どもたち全員が理解することのできる授業を、諦めずに目指していきたいです。

三つ目は、「残りの大学生活で学ぶべき課題を見つけ、これからの研究目標をつかむ。そして、教職の魅力を確認し、責任感・使命感を高める」です。この4週間で、私の思う教職の魅力を感じることができました。毎日眠れない日々でしたが、子どもたちの顔を見ると元気が出るし、必ず教師になりたいと改めて思うことができました。実習を終えてより深く学びたいと思う事柄はたくさん出てきましたが、残りの大学生活では、特に「道徳」について研究していきたいと思っています。

H小学校の全ての先生方、子どもたち、そして支えてくれた家族への、私のできる恩返しは、頑張っ教師になることだと思います。これから、この4週間で得たことを一つも無駄にしないよう一生懸命努力して、必ず教師になりたいです！

幼稚園実習を終えて

教育学科 4回生

中井愛里

私は、1年間を通して2週間に1度、大学附属の幼稚園で教育実習をさせていただきました。実習生は4名に分かれて各クラスに入り、私は4歳児クラスを担当しました。2週間連続の保育所実習とは異なり、1年間を通しての実習のため長期的に子ども達の成長を感じ、運動会、音楽あそびなどの園行事の取り組みについても学ぶことができました。実習で学んだことの中で、最も印象に残っている出来事を述べたいと思います。

まず1つ目は、子どもの気持ちに寄り添うことの大切さです。この1年間に幼稚園でたくさんの子どもの姿に出会いました。一生懸命に活動に取り組む子ども、やりたいことが思うようにいかず涙を浮かべる子ども、自分の力でできたことに笑顔で喜ぶ子ども、同じ活動をしていても子ども一人ひとりの気持ちはさまざまです。私はこの1年間、子どもの気持ちに向き合い、丁寧にかかわろうと意識して実習に取り組みました。思うようにいかず保育者に頼ってくる子どもには、出来なくて悔しいという子どもの気持ちに共感し、出来るだけ自分の力でできるように援助をしました。子どもは、自分の力でできた喜びを味わうことで達成感をもち、自信につなげることができるのだと思います。そして身近な場所に自分の思いを理解してくれる保育者がいることで、子どもは安心して自分の気持ちを表現し、生活を送れるのだと感じました。

2つ目は、「保育は日々の生活の積み重ねである」ということです。幼稚園では運動会、音楽あそび、劇あそびなどの行事がたくさんあります。どの活動も先生方が主体的に進めるのではなく、子どもが主体となって、保育者が子どもの意見を取り入れながら進められているのが印象的でした。子どもは普段の生活で習慣となっていないものをいきなりやってみようとしても上手くいきません。運動会の入場の際に並ぶことも普段の生活で並ぶ練習をして習慣となることでスムーズに男女別にならんだり、劇あそびにスキップを取り入れるのであればスキップをして遊んでいる普段の生活体験を取り入れて劇遊びを作っていくことが大切であると学びました。

3つ目は、保育者の言葉がけの重要性です。先ほども述べたように保育は子ども主体でなければなりません。そのためには、保育者が子どもに強制させるような言葉がけをするのではなく、子どもたちに興味・関心がもてるような言葉がけをし、子どもが自ら「やってみたい!」と思えることが大切なのです。実習の最初の頃はクラスの子どもたちがどのような性格の子どもなのかがわからず、どのようにかかわれば良いのか難しく感じるが多かったのです。少しずつ子どものがわかるようになって、先生方のかかわり方を見ながら子どもに合った対応の仕方を考えて誘いかけたり、提案したり、共感する言葉かけが出来るようになりました。

人間形成の重要な時期である子どもの保育を行う中で、大変なことはたくさんあり、子どもへのかかわり方がそれで良かったのか悩むこともありました。しかし、保育者というのは子どもの成長を一番近くで見て、感じて、子どもと共に喜び合える素敵な職業だと改めて感じる事ができました。

実習での学びや先生、子どもたちとの出会いは私にとって大切な宝物となり、4月から保育士として働くことへの自信にもなりました。まだまだ不安なことはたくさんありますが、笑顔を忘れず、一人ひとりの子どもの気持ちが考えられる素敵な保育者になりたいと思います。

そして最後に、たくさんの貴重な経験をさせてくれた子どもたち、忙しい中、丁寧に指導してくださった先生方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

幼稚園実習を終えて

教育学科 4回生

吉井 順子

私は、この4週間の幼稚園実習で、多くのことを学ばせていただきました。公立幼稚園の4・5歳のクラスをそれぞれ2週間ずつ担当させていただきました。私はこの実習を通して4つの事を感じました。

1つ目は、保育の難しさです。2つのクラスに入り、保育補助・実習をさせていただきましたが、大学の講義で学んだことを保育に活かす難しさを感じました。現場に出て初めて気づくことも多く、毎日勉強・学びの繰り返しでした。大学で行った模擬保育とは違い、予想していなかったことや、準備していた通りに進めることが出来ず、あらためて講義と現場の違いを実感しました。この経験を通して、多くのことを学び、得た知識をボランティアなどで実践していくことが大切だと思いました。

2つ目は、子どもの興味を引き出す環境づくりの大切さです。この実習で多くの部分実習を経験させていただきました。保育をするときに、間があきすぎて子どもの集中が切れることがありました。子どもは楽しいことには興味をもち、楽しくないことには興味を示しません。この経験から保育内容や実習計画をよく話し合い、子どもが自ら「やってみたい」「真似してみたい」と思えるような保育が出来るようにし、子どもが心から楽しめる保育を行えるように努力していこうと思いました。

3つ目は、知識の少なさです。実習中に保育を任せていただけたときがありましたが、とっさに行える手あそび・歌あそびなどの知識の少なさを感じました。知っているだけでなく、実際にこどもの前で行えるように、実習前に習得しておくことが大切だと思いました。また、ピアノなどは平日頃から練習しておくことも大切だと思いました。

4つ目は、幼稚園教諭のやりがいです。実習を行う時期に、園の行事で運動会があったため、保育時間中に運動会の練習をすることが多くありました。初め上手くいかなかった子どもたちは、何度も何度も練習をし、成功させることが出来ました。成功した子どもの姿や、子どもとともに喜んだ時に、子どもの成長を一番近くで見て感じることでできる幼稚園教諭にやりがいを感じ、もっと子どもの成長を見ていきたいと感ずることができました。

実習を通して、多くのことを経験し、さまざまなことを学びました。初めはとても不安を感じていましたが、子どもと過ごす4週間はあっという間でした。幼稚園教諭は子どもの命を預かる仕事であり、意識を高く、責任感をもって保育することが大切です。辛いことや上手くいかないことも多かったです。その経験全てが自分の力になったと思っています。今回の実習で、感じたこと・経験したこと・実習で感じた課題を今後活かしていけるように努力していこうと思います。

お忙しい中、後輩育成のために面倒を見てくださった先生方にとっても感謝しています。この実習で得たことを、今後活かしていけるように努力していこうと思います。

教育実習を終えて

家政学科 4回生

明野香穂

母校での3週間にわたる教育実習は長いようで短い期間でしたが、毎日が学ぶことばかりで充実していました。日々、自分自身への課題が見つかり、少しずつ手応えを掴み始めたところで実習を終えてしまったように感じます。

1週目は教師の仕事を一通り知ることを目標に過ごしました。先生方は出勤後、連絡事項の確認や授業の準備、保護者の対応など授業以外の校務や事務処理に忙しくされていました。私が気づいた仕事はほんの一部に過ぎないと思いますが、生徒の時には知り得なかった教師の仕事の多さを目のあたりにすることになりました。

4日目から実際に授業をしましたが、作成したプリントを終わらせることに必死になってしまい、ただ伝えるだけの授業になってしまいました。授業は生徒が理解することによって成り立ち、生徒の反応を見ながら、今何を学んでいるかを理解させることが大切だということを痛感しました。また、学科の異なる3クラスの授業を担当しましたが、同じ単元の授業をするにしてもクラスによって興味をもつところ、理解が難しいところが違うなど反応がさまざまで、クラスの実態に合わせて授業をするために、流れや発問の工夫が課題となりました。

2週目からは毎日授業をするようになり、徐々に教壇に立つことに慣れていきましたが、反省や課題は尽きることはありませんでした。指導教諭の先生には、授業を終えるたびに的確な指導をしていただき感謝の気持ちでいっぱいです。私が想像もしなかった授業方法や知識を教えていただき、生徒に「気づき」をもたせることの大切さや、生徒が家庭科を日常に結び付けて主体的に学べる授業の大切さを教えていただきました。

実習中は生徒とのコミュニケーションを心がけていましたが、自分自身のことに必死になってしまい、ゆっくり生徒と向き合う時間が取れませんでした。ただ、実習に入る前に担当クラスの名簿をいただいていたので、早い時期から授業中はもちろんのこと、授業以外でも生徒一人ひとりを名前で呼ぶことができました。

教師としての困難や厳しさを感じる中で、生徒が話しかけてくれることや笑顔からやりがいや喜びを感じることができ、私にとって学びの多い充実した実習となりました。この実習を通して、生徒へ教えることの責任を感じ、授業をしたらそれで終わりではなく、より良いものにしようと反省を加え、自らも学び続けることの大切さを実感しました。この実習で得た経験や課題は今後の大きな財産として、教師の道へ進みたいと考えています。

たとえ少しでも自信をもって教育実習を終了できたのは、未熟でおぼつかない授業であっても一生懸命聞いてくれた生徒や、温かく指導してくださった先生方のおかげだと感謝しています。

栄養教育実習を終えて

管理栄養士養成課程 4 回生

田 尻 加 奈

私は母校の小学校で、5日間の栄養教育実習をさせていただきました。初日はオープンスクールだったために担当させていただいた3年1組と関わることはできなかったのは、実質たったの4日間でした。他の教育実習生に比べてとても短い実習期間なので、その間でどれだけ多く児童と関わるができるかが重要だったと思います。実習中は主に、さまざまな教科の授業参観をし、また給食室に掲示する栄養媒体の作成も行いました。そして最終日には、3年1組でおやつを題材とした研究授業もさせていただきました。

母校の小学校は給食がセンター方式であり、栄養教諭の先生はいらっしゃらなかったもので、調理の現場を見ることはできませんでした。しかし、給食センターの栄養教諭の先生の食育の授業を参観したり、私の行った研究授業の指導をしていただいたりしました。自校式給食ではないため直接児童の声を聞くことができず、児童の実態を知った上での授業が難しいことや、給食の時間の指導については、現場の学校の先生方にまかせっきりになってしまうことなど、センター方式の給食の課題などを知ることができました。

私が教育の現場に入らせていただき、まず感じたことは、先生方は常に児童のことを一番に考えているということです。どんなに忙しい中でも児童の健やかな成長を支援したいという意識をもつことが教育者にとってもっとも大切なことのように思いました。また、児童は先生のことをすごく信頼し、見本にしています。先生は自分に自信をもち、児童の前では胸を張っていなければいけないように思いました。

次に授業についてです。先生方は授業の中で、児童の発言をととても大切にし、児童主体の授業を行っておられました。児童が授業中にこぼした言葉や本音の部分をしっかりと拾い上げて、児童が自ら気づき、学んでいけるように援助を行うことが大切だと学びました。授業を見せていただいた後、研究授業の指導案を大幅に訂正し、伝えたいことを絞り、児童の印象に少しでも残るように楽しみながら勉強できる内容に変更しました。食育の授業は教科書がないため、指導案をしっかりと作り上げて授業のイメージを考えておくことが大切であると知りました。

そして研究授業では、3年1組で『おやつのととり方』についての授業をしました。児童は普段食べているお菓子のカロリーが意外だったようで、とても興味津々でした。元気が良く、素直な児童の多いクラスだったために、私自身も楽しんで授業を行うことができました。初めての授業で課題も残りましたが、教えること、伝えることこの難しさを実感し、とても貴重な経験となりました。

教育実習を通して、先生に対する児童の信頼と、児童に対する先生の愛情が教育の現場に一番大切なことのように思いました。とても短い期間でしたが、お忙しい中ご指導してくださった先生方に感謝し、実習で学んだことを今後活かしていきたいと思います。

教育実習を終えて

健康スポーツ栄養学科 4 回生

児 玉 弥 生

5日間という短い期間でしたが、芦屋市の給食に対する思いや、先生方の食育に関する真剣な取り組みを実際に感じ、たくさんの学びと貴重な経験ができました。

午前中は、調理室に入らせていただき、検収・下処理・食器の準備を行いました。調理室では次のことを学びました。まず、給食のメニューの内容で印象に残っているのは、完全手作りを徹底されていること、アレルギーの児童に対する除去食の実施、調理師さんたちの児童に対する配慮などです。完全手作りというのは、5日間のメニューにあった、春巻き・いなり寿司・コロッケ・しゅうまいのメインの料理がすべて手作りだったということです。春巻きは1個1個調理師さんたちが巻きます。また、いなりずしのあげも給食室で炊きます。コロッケもじゃが芋を剥くところから始まります。作る工程の中では、手間のかかる作業も見受けられましたが、毎日とてもテキパキとした調理で余裕をもって時間内に作業を終えておられました。アレルギー除去食については、豚肉が食べられない児童の食材を鶏肉に変えたり、オムライスの卵を無くしたり、いろいろな除去食を工夫されて小さなフライパンで作られていました。調理師さんたちの児童に対する配慮としては、教室で配膳する際にトングで取りやすいように隙間を開けたり、各学年に対応した食事のできあがりの大きさや量、野菜の大きさなどを調整したりしておられました。また、会話をしながら、常に児童の立場に立って、美味しい給食を作られていました。なにより、そういった注意点や、指示の音が飛び交う、明るい調理室で、児童に提供する食事を作る方々には、活気がありました。

給食の時間は2年1組を訪問して、5日間一緒に給食を食べさせていただきました。児童はとても元気で、毎日出される給食クイズに真剣に取り組みました。お替りも積極的でした。苦手な食べ物は、手を付ける前に返しに来て、自分の食べられる量を把握させます。その後、お替りを受け付けるとたくさんの児童が前へやってきてお替りをします。毎日ほぼ残食ゼロということに感心しました。

午後は、5日間の給食の献立を基準に合わせて立てることに参画しました。また、ランチルームの装飾も行いました。献立は、器の種類や、汁物と副菜のバランスを考えて立てます。課題は、味の少ないコッペパンの残食を減らすためにパンに合う主菜を考えること、残食を減らすこと、栄養バランスの整った内容であることなど、非常に難しいことがたくさんありました。栄養士さんのお仕事は献立作成・ランチルームの装飾、研修や出張、毎日の給食調理の実施、会議などで大変忙しい様子でした。また、栄養士さんから食育の実施のお話も聞くことができました。児童の野菜嫌いを克服するための一番の方法は、野菜を実際に栽培することだと教えていただきました。野菜が育つ過程を見たり、世話をしたりすることで、食べ物のありがたみや、大事さを知るようにされているとのことでした。また、国語の「大豆の変身という物語」の授業を通して、大豆が豆腐やしょうゆや味噌などのさまざまな形に変化することを学ばせることもされているようです。さらに、家庭科や生活科、総合の時間との連携で、食について学ぶ機会はたくさんあるとおっしゃっていました。

現在は、2年ほどかけて味噌作りをされているそうです。このように、家庭ではなかなか体験することのできないことも実施しながら、多くの機会を活かして食育をされている現場を知ることができたのは非常に嬉しかったです。

実習最終日、2年1組のみなさんには、本当に素敵なメッセージのプレゼントもいただきおおいに感動しました。これらの経験から、自分はどんなことを大事にしてこれから仕事をしていきたいか気づくことができました。今後につながる大変貴重な実習になりました。

教育実習を終えて

健康スポーツ栄養学科 4回生

三木 沙織

「ありがとうございました！」授業終了時の挨拶として、研究授業を終えた私に子どもたちが言ってくれた言葉。私はこの時の、「ありがとう」を一生忘れません。

私は、1週間栄養教諭として教育実習に行かせていただきました。実習期間前からの指示で、給食だよりや学習指導案の作成などを行っていたため、実習中は主に児童と関わったり、栄養教諭以外の先生方の話もたくさん聞けました。毎日が新鮮で、子どもたちの笑顔に癒され、朝、校門をくぐるときには「よし、今日もやるぞ！」と清々しい気持ちで1日のスタートをきっていました。

実習の中での主な内容は、給食だよりの作成、調理場（給食室）での食材の下ごしらえ、給食前に各クラスで読む一口メモの作成、毎朝の1分間スピーチ、家庭科の授業（ミシン）の補助、研究授業でした。どの活動にも、私らしく実習生らしく一生懸命に取り組みましたが、その中で最も印象に残っているのは、やはり研究授業です。大学では模擬授業を数回行っただけなので、実際に小学生の前で教壇に立つのは初めてで、とても心配でした。しかし、私が少しでも不安そうな顔をしたり、慌ててしまうと子どもたちにそれらは伝わり、授業を楽しんでもらえないと思ったので、常に表情には気をつけていました。先生方からは、「笑顔が良いね！」「あなたの良さが出せている」などと、誉めていただき、とても嬉しかったです。クラス全員で取り組める授業にしようと心がけていたものの、1人の発言に対して「なぜ？」と他の児童にもう一度考える機会を与えることが、なかなか出来ませんでした。答えがひとつではない、食に関する授業では子どもたちの考える力を育て、子どもたち同士のヨコの繋がりをもっと大切にしていかなければならないと、今、改めて感じています。

今回の教育実習を通して、課題が見つかる一方、先生方からは「学ぼうとする気持ちが強く、どんどん吸収していく様子が見られました。」「あなたのもっている人柄が、子どもたちにもよく伝わっているのだと思います。」などと、嬉しいお言葉をいただき、子どもたちからは、「また先生の授業受けたいな〜。」「三木先生に、たくさんの元気をもらいました。」など、涙が出るくらい嬉しい言葉をもらって本当にやりがいを感じることができました。当然、すべての活動に満足しているわけではありません。しかし、先生方の言葉や子どもたちの笑顔に、励まされ、それが自信に繋がり、もっともっと勉強したいと思いました。

教育実習を終えてからも、運動会や授業見学で何度か学校へ伺うことがあり、先生方は「おかえり〜」、「先生、久しぶり〜」などと言ってくださり、本当に良い環境で実習をさせていただけたと感じました。子どもたちは今でも道で会うと「三木先生！」と声をかけてくれます。私が行った1週間という短い期間の実習でも、子どもたちの記憶にはきちんと残っていると思うと嬉しくなります。今回のこの内容の濃い1週間の実習を終えて、改めて栄養教諭になりたいと強く思いました。あの日の「ありがとうございました！」をもう1度聞けるよう、日々精進していきたいです。

観察実習レポート I

教育学科 2回生

黒木 爽子

1. スクールサポーターとしての活動から得たもの

① 児童との関わりから得たもの

どんなに疲れていても「頑張ってスクサポ行こう!」「今日も小学校行ってよかった!」と思えたのは、児童たちの元気や笑顔、優しさや素直さのおかげだと思います。教師の仕事の大変さを知るとともに、児童のためにならその大変ささえも乗り越えられるという、教師のやりがいの部分を子どもたちとのたくさんの関わりの中で教えてもらいました。

② 教師との関わりから得たもの

先生方は、受けもったクラスはもちろん、同学年、また学校全体の児童に目を向けて生活していらっしゃるなと思いました。特にクラスの子たちとの信頼関係は深く、ぶれない基準をもって指導しているし、担当学年にあった褒め方と叱り方をされていました。先生方はそれを意識しつつも経験から反射的にされているのだろうと感じ、経験の大切さを学びました。

③ 学校という組織との関わりから学んだこと

職員室では、担任と教頭先生の「〇〇くんのケガは治ったの?」とか「〇〇の活動はだれが担当か?」などという会話を耳にすることがよくありました。毎日の朝の見守り、各委員会を担当する先生も決まっており、教師一人で仕事をするのではなく、“同じ学校で同じ子どもたちの成長を支援する仲間やチーム”として学校が成り立っているのだということをひしひしと感じました。

2. サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていること

子どもたちからもらった言葉ひとつひとつが心に残っています。「先生の説明でこの問題わかった!」「また一緒に〇〇してな」というように一緒に活動したことについて感謝してくれたり、「来週もくるん?」「給食一緒に食べて帰って!」と私が帰るときに毎週言ってくれたり、「先生は黄色が似合うね」「先生の顔かけるよ」「先生の名前漢字でかけるよ」とよく観察しているなど感心するようなことを言ってくれたり、心が温くなる言葉をたくさんくれました。

また、児童の成長と適応力の早さも驚きました。1週間の間に先週できなかったことを克服していたり、転校生とすっかり打ち解けていたり、学習面でも人間関係の面でも言えます。この先入観が少なく成長発達の著しい時期の支援をする教師の存在の重要性を意識していきたいと思います。

3. 特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞り、小学校で学んだこと

私は主に3年生と一緒に活動しました。その中の、去年までは「なかよし」と「通常学級」で通級していたけれど、今年から通常学級で学習するという子を中心に支援して欲しいと依頼されました。発達障害をもつ男の子で、初めは私が上手く支援することができずお互いに困る状態でしたが、その子の特性(好きなもの、特技、癖)がわかるとスムーズに声かけができるようになりました。回数を重ねるごとに、名前を覚えてくれたり、「来週も来るの?」と聞いてくれたりして、少なからず自分のことを信頼してくれているのかなと感じられました。担任の先生は他の子と同じように褒めたり叱ったりしながらも、その子が苦手とする場面では声かけをしたり、テスト用紙のふりがなを見やす

くしたりと、よりスムーズに力が発揮できるように配慮していました。児童の実態を理解し、関係性を深め、苦手な部分でもっている力を発揮できるような工夫をするという、教師としての基本的な意識が特別支援教育においても最も大切なのだと感じました。

4. スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題・改善点・アドバイス。

小学校の先生方も「来てくれるとありがたい」というような嬉しい言葉がけをしてくださり、回数を重ねるごとに活動に対する不安はなくなりました。しかし、最初はどこまで自分が介入して良いのかが分からず不安になることもありました。そのため、2回生（スクサポに初めて参加する人）に対しては、先輩方の具体的な活動やアドバイスを聞ける機会があると、初めの不安が軽減されると思います。しかし、学校内での自分の立ち位置を、迷いながらも自分なりに探し確立させていく過程を経験できたことも良い経験になったと感じています。

5. 2・3回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？またその理由を記述してください。4回生は下級生にスクールサポーターを勧めますか？またその理由を記述してください。

私は来年も応募したいと考えています。週に一回だけの活動でしたが、ここには書ききれないほどたくさんのことを学びました。将来、自分の職場となるであろう小学校の実態を知る機会はなかなかないし、自分が目指す教師像はさまざまな児童または先生方に出会うことで確立されていくのではないかと思います。今回は〇〇小学校の3年生と共に活動することが多かったのですが、スクールサポーターとして活動するなかで、「小学校が変わればどうなるのだろうか？」「学年が変わればどうなるのだろうか？」「今3年生の子たちが4年生になればどうなるのだろうか？」というふうに疑問や興味関心が増してきました。実際に教員免許を取得して教師となるまで一番早くてもう2年ほどしかありません。それまでに大学の講義だけでは学べない人との関わりを通しての学びを大切にしたいと思い、今後も活動することを希望します。

6. 将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に活かしますか？

教員でもなく、保護者でもなく、児童生徒でもない、といった距離感で学校と関わる事が出来るのはスクールサポーターだけだと思います。担任を受けもち30人近い児童のことを授業をしながら毎時間丁寧に見れるかといえば、それは難しいです。しかし、スクールサポーターの活動を通して、「算数のこの単元では理解の差が大きい」「体育の危険はこういう場面に多い」というような見るべきポイントを学ぶことができたので、そのポイントに沿って自分のチェック基準をつくり指導に活かしたいです。また、同じ単元でも先生によって授業の工夫が異なっており、大変勉強になりました。将来の教材研究につながる貴重な学びだと実感し、今後の実践に活かしていきたいです。

7. その他、特別支援、学級経営、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

週に1回気持ちが引き締まる日がスクサポの日です。「先生」と呼ばれることで自分の人間性や日頃の生活を見つめなおす機会となります。また、スクールサポーターは回数を重ねるごとにやりがいを感じる活動であり、教師になる前にこのような経験をできるのは大変ありがたいことだと思っています。今後も続けるからには、少しでも力添えができるように大学での学びを活かし実践していきたいと思っています。

観察実習レポートⅡ

教育学科 4回生

菅 瑞 希

1. スクールサポーターとしての活動から得たもの

①児童との関わりから得たもの

どうして友達を叩いてしまうのか、どうして宿題をやってこないのか、どうして授業を聞かないのか、子どもを取り巻く問題には全て理由があり、それは周りの環境や大人がそうさせているのだと学びました。私は去年からのもち上がりで2年間を通して子ども達の成長や心の変化を見ることができました。私が担任になった時にも、〇〇小学校の先生方のように子どもの周りにはいる大人の一人として、子どもを守ってあげたい、愛したいと思いました。

②教師との関わりから得たもの

子どもは十人十色でクラスによって、その日の子ども達の様子によって、授業を変えなければならぬと学びました。私は5年生2クラスで同じ先生が行う算数の授業を見させていただいて1組と2組で先生の説明の方法が異なることに驚きました。順を追って一つ一つ丁寧に説明した方が良い場合、子どもの集中力を考えて一気に解説した方が良い場合など、授業を使い分けていきたいと思います。

③学校という組織との関わりから学んだこと

「ほう・れん・そう」の重要性を学びました。私がお世話になった〇〇小学校では、教師間だけでなく、子ども達、家庭、地域との報告、連絡、相談が徹底していたと感じます。まず、教師間においては、児童についての情報のやり取りが、いつも職員室で行われていました。担任が一人で全て抱え込むのではなく、一人ひとりの問題を学校全体の問題として考えることが子どもにとって大切だと思いました。また、もし子どもが先生のことを好きだったら、その両親も学校に文句を言って来ることもないと思います。だから、子ども達や家庭へのほう・れん・そうを大切にして信頼される教師になりたいと感じました。さらに、地域とのほう・れん・そうを密にすることで、互いに協力し合っていくことが大事だと思いました。

2. サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていること

私は、自然学校に指導補助員として参加できたことが一番印象に残っています。4年生の時からずっと関わってきた子ども達だったので、自然学校のお話をいただいた時はすごく嬉しかったです。また、総合学習の時間で、自然学校の目当てや係を決める準備段階から参加することができました。登山や、野外料理、ナイトハイク、焼板作りなど盛り沢山の毎日に、普段の学校での座学は苦手な〇〇小学校の5年生が、これらの体験を通して去年度よりも自分で考えて行動することが出来るようになっていったと感じました。

キャンプファイヤーは、ゲームや歌のプログラムを全て任せていただき、計画しました。YMCAでリーダー活動をしているので、キャンプファイヤーをすることには慣れていましたが、子ども達を

喜ばせることが出来るのか心配で前日の夜は眠れないほど緊張しました。しかし、本番では先生方の協力もあり、大いに盛り上げて、最後はしんみりと終わることが出来ました。何人かの子ども達が友達や家族の大切さに気づき、涙している姿を見てやり遂げたという達成感を感じました。4泊5日の宿泊体験は子ども達と教師との関係、子ども達同士の関係をより密にし、お互いの絆を深めることが出来たと感じました。

3. 特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞り、小学校で学んだこと

私は担任教師が児童に向けてしていた“良いクラスになるために”という話に感銘を受けました。音楽会を一週間後に控え、先生は黒板に大きく、「清掃・提出物・あいさつ・整理整頓・係・発表・歌…」などの単語を大きく書きました。「教室が汚かったら良いクラスにはなれない。提出物が揃わなかったら良いクラスにはなれない。あいさつが出来なかったら、整理整頓が出来なかったら…でも皆はここに書いてある全てが出来ているよ。」と言って先生は子ども達をたくさん褒めました。褒めた後に、今出来ていないことを指摘しました。高学年になるほど、叱り方や褒め方が難しくなり、それら一つで子ども達の中での不信感になることもあります。しかし、同時に次からも頑張ろうというきっかけにもなります。私はこの先生から学級経営において褒め方、叱り方を工夫することで、子ども達自身が考えて行動できるようになると学びました。

4. スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題・改善点・アドバイス。

今年は四回生のスクールサポーターが少なかったと聞きました。私の周りにも、何人か採用試験の勉強を理由にスクールサポーターの活動をしなかった友人がいました。後期から参加するというシステムはありますが、9、10月に二次試験が行われる自治体も多く、後期からの予定が参加を申し込む時点では分からないので、私自身もすごく悩みました。しかし、採用試験が終わってから、現場を知っておきたい、子どもと関わっておきたいと考え始め、申し込まなかったことを後悔した4回生は多いように感じました。だから、もっと参加する時期を選べるようにしたり、後期以降も申し込んだり出来るようになれば、もっと、このシステムが浸透すると思います。

5. 2・3回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？またその理由を記述してください。4回生は下級生にスクールサポーターを勧めますか？またその理由を記述してください。

私は、来年度より小学校教員になりますが、学生のうちにスクールサポーターとして児童の前に先生として立てたことは、大きな自信になりました。尊敬する素晴らしい先生方、慕ってくれる子ども達と過ごした時間はかけがえのない宝物です。子ども達の笑顔と、「絶対に先生になれるよ」という温かい言葉は、辛い採用試験の勉強中にいつも私を励まし、勇気づけてくれました。教員を目指す下級生には、学生の中に、素敵な出会いや経験をたくさんしてほしいと願うので、強くスクールサポーターを勧めます。

6. 将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に活かしますか？

12月7日に学校行事があり、その運営の仕方が、とても子ども達の主体性を尊重していたことに驚きました。1・6年生、2・4年生、3・5年生がペアとなり、各クラスで趣向を凝らした「チャレンジ店」を開いていました。店長を中心に、飾り付け係や呼び込み係などのそれぞれの係が、どのような店にするかを自分たちで話し合っ決定し、運営している姿がとても印象的でした。前半と後半に分かれ、店員と客を交代で行い、先生の介入はほとんどなく、子ども達の手で運営されていました。このように子ども達自身で作る上げる学校行事は今ではだんだん少なくなっているように感じます。しかし、この学校行事はPTAも協力し、理想的な形であると感じました。子ども達の自主性や、主体性を尊重するということは子ども達の力を信じるということだと思えます。これは、学校行事の場面だけでなく、平素からの学校生活においても同じことが言えます。全てを教師が子ども達を先導するのではなく、時には信じて見守るという姿勢を、教育活動に活かしていきたいです。

7. その他、特別支援、学級経営、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

ご多忙にも関わらず、いつも丁寧にご指導していただいた先生方には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。私も先生方のように、いつも子どもの傍に寄り添う先生になりたいと思います。また2年間、一緒に過ごした5年生の子ども達との別れは悲しいですが、来年6年生になって最高学年として学校を引っ張っていく姿を想像すると、すごく楽しみです。本当にありがとうございました。



観察実習レポートⅢ

教育学科 4回生

高橋 若 恵

1. スクールサポーターとしての活動から得たもの

①児童との関わりから得たもの

児童とできるだけ多く関わることの大切さを学びました。休み時間に児童と一緒に遊び、コミュニケーションをとることで児童一人ひとりの個性や性格がわかり、また信頼関係も築くことができたので、遊ぶことの大切さと必要性を学びました。また、休み時間だけでなく授業中も一人ひとりの様子をしっかりと見ることで、この児童にはこういう風に指導や言葉かけをした方が良いなどの、一人ひとりの性格や様子に合わせた指導や言葉かけができるようになったため、学校で児童とともに過ごす時間を大切に、常に児童に目を向けて関わることの大切さを学びました。

②教師との関わりから得たもの

児童達の今だけを考えて指導するのではなく、先を見据えた指導をすることの大切さを学びました。例えば、低学年で自分勝手な行動が目立つ児童が何かわがままな行動をした時に、まだ低学年だからといってその場だけの指導をするのではなく、この児童が自分勝手な行動やわがままが直らないまま中学年や高学年に上がった時、それらが原因で他の児童達とトラブルが起こるかもしれないということまで考え、その児童の先を見据えて指導するというように、今だけでなく、将来を見据えた指導をすることの大切さを学びました。

③学校という組織との関わりから学んだこと

緊急事態が起こった時の対応について学びました。例えば登下校中に児童に何かが起こり、その時すぐに担任の先生が駆けつけられない場合に、ほかの先生が現場に行き対応し、戻った後担任の先生に状況を伝えるなど、教師同士で連携することの大切さを学びました。また、児童の登校時間直前に警報が発令された時には、小学校のホームページで知らせたり、警報が出ていることを知らずに登校してきている児童が安全に自宅に帰れるよう教師が通学路に行ったりするなど、学校全体で児童を守るということを学びました。

2. サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていること

私が一番印象に残っていることは、音楽会へ向けての合奏の練習です。

2年生は、初めて鍵盤ハーモニカで追いかけて奏に挑戦したのですが、練習を始めたばかりの頃は、まだ楽譜を覚えきれていない児童が多く、指揮を見る余裕がない児童が大半で、個人個人のスピードで弾いていたため、全然合奏が揃いませんでした。しかし、児童はもっとうまくなりたいと言い、朝いつもより早く学校に来たり、休み時間を返上して練習をしていました。また、まだできていない児童に教えて一緒に練習をしたりして、どんどん上達し、本番では全員揃った素晴らしい演奏が出来ました。私は、この学年の児童が1年生の時分から、スクールサポーターで関わっていたため、先生に言われなくても自分たちで考え、行動が出来るようになったという、1年生の頃にできなかったことが出来るようになっていくのを目の当たりにし、より一層児童の成長を感じました。

3. 特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞り、小学校で学んだこと

私が、2012年度のスクールサポーターでの活動で一番学んだことは、学級経営をしていく上で、

教師がぶれないということです。

教師の発言や行動がその時々で違ったり、ある児童にはだめと言ったのにほかの児童には良いと言うなど、軸のない言動を取ってしまうと、児童たちは何が正しいのかわからなくなってしまい、学級内で混乱が生じます。また、学級内での決まりごとやルールなどがあやふやになってしまうのも、学級内の混乱につながり、ひどい場合にはそこから学級崩壊に発展することもあります。このようなことが起こらないよう、教師は自分の中にしっかりと軸をもち、その軸がぶれたりあやふやにならないよう常に意識して児童と関わり、学級づくりをすることが学級経営をしていく上でとても大切だということを学びました。

4. スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題・改善点・アドバイス。

後期はほとんど授業がなかったため、スクールサポーターでの活動にあまり支障は出ませんでした。

1～3回生では、授業がつまっているためスクールサポーターに行ける日がない、またテスト前やテスト期間中はテスト勉強のためにスクールサポーターに行けないという場合が多かったのですが、4回生になると、授業が減る代わりに教員採用試験やそれに向けての試験勉強があるため、1～3回生とはまた違った理由で、スクールサポーターと学業の両立が難しかったです。

5. 2・3回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？またその理由を記述してください。4回生は下級生にスクールサポーターを勧めますか？またその理由を記述してください。

私は、下級生にスクールサポーターを勧めます。

スクールサポーターでの活動は、決して楽なことばかりではありません。しかし、大学の講義や本などでは学べない、実際の教育現場でこそ学べるものがたくさんあります。実際に自分で見て、感じて、体験して初めて学べるものが本当にたくさんあります。先生方もたくさんの方を教えてください。ぜひ、スクールサポーターをすることを勧めます。

6. 将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に活かしますか？

私は、このスクールサポーターでの経験を、春からの教師生活で大いに活かしていきたいです。約3年間スクールサポーターとして、また約2年間特別支援としても活動をさせていただき、児童への接し方、児童の叱り方やほめ方、授業の進め方、指導の仕方、学級経営の仕方、緊急時の対応など本当にたくさんの方を学ばせていただきました。どれも大学の講義や本などでは学ぶことの出来ない、とても貴重なことです。このスクールサポーターでの活動を通して、自分の中での教育に対する意識も変わりました。春からの教師生活では、この経験を活かした指導をし、経験を踏まえた学級作りや学級経営をしていきたいです。

7. その他、特別支援、学級経営、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

私は、3年間神戸市スクールサポーター、また2年間特別支援として〇〇小学校で活動させていただきました。これらの活動をすることにより、絶対に教師になりたいという意識が高まり、教員採用試験の勉強の励みにもなり、無事に合格することができました。毎回温かく迎えてくださった〇〇小学校の先生方や、たくさんの方を学ばせてくれた児童への感謝の気持ちを胸に、春から教師として頑張ります。

ボランティアを通して学んだこと

教育学科 3回生

賀内 亜衣

私には、子どもに関わる仕事に就きたいという小さいころからの夢だった思いがあったので、大学で教育学科に入り、教職を学ぶことを決めました。保育士か幼稚園教諭になりたいという考えが生まれ、授業では学べない実践での学習がしたく、いくつかのボランティアに参加しました。

幼稚園の異年齢でのかかわりを学んだり、保育園の生活を見たり、幼稚園の1日の流れと教諭の働きなどをボランティアという目線ではありますが、見てきました。

私が想像していた以上に子どもと関わるということは大変でした。朝から1時間近く子どもたちと走り回ったり、泣いている理由を話してくれなかったり、どこまで補助したらいいのかなど学校では学べないリアルなものを体験しました。担任の先生と相談して解決をし、毎回毎回先生にたくさんのご迷惑をかけましたが、自分の中で確かに得たものがありました。

今も公立の幼稚園にボランティアに行き、いろいろなことを学んでいます。その園では4歳と5歳の1クラスずつの2年保育をしており、私は毎週交代にそれぞれのクラスに入らせてもらっています。クラスを交代制で入ることにより、子どもたちの発達段階をより感じる事ができています。4歳児クラスで絵具を使って製作した後、先生の「Aちゃんの絵はたくさん色を使っていてきれいだね。」という言葉聞いて子ども同士で「きれい〜。」「かわいい〜。」などお互いを認め合っていました。次の週に5歳児クラスに入った時には、絵具の製作中に、Sちゃんが「Yちゃんの桜本物みたいですごく上手！」と自分たちで友だちの良さを話し、認め合う姿を見て、1歳しか差はないけれども違いがあるのだなど実感しました。

たくさんボランティアに参加していく中で自分の弱点や課題を見つけることができました。私は学生であるうちにそれらを1つでも改善していかななくてはならないと考えています。いろいろな場面に遭遇し、子ども一人ひとり違う対応をしていかななくてはならないし、そのためにも自分の中でいくつもの選択肢をもっていないといけないと考え、授業で学んだことをいかに自分のものにできるかが授業を学ぶ上で大切なのではないかと考えています。あと学生でいられるのも1年です。残り1年でさらに実践で使える力を養っていきたいと考えています。